

『連歌至宝抄』の紹介・翻刻

白石美鈴

家蔵本『連歌至宝抄』の紹介と翻刻をする。

書誌および本文の特色

体裁 袋綴一冊。縦二二、七センチ。横二〇、二センチ。書名はない。一から五丁目までの左肩小口部分が破損しており、雑の言葉の最後の丁(三九丁)書口は破れて、文字部分に破損がある。本文は、「夫連歌は……」からはじまり、雑の言葉の部の「一おもなし 無面目也」で墨付三九丁裏が終わる。多くの諸本に付載されている「此一帖は、日の本をひとせたらぬ程に……略……天つ正しき十とせの三が一の秋の初めにしるす者也。法橋紹巴」の奥書はなく本文のみの改装本で、「雑の言葉」の最後の本文が最尾の丁となる体裁である。室町後期の写と推察する。侵水跡と汚れがある。

表紙 無地壇紙。外題、内題なし。

書入 朱の合点、墨でミセケチ、書き入れあり。

本文 当本は、『連歌至宝抄』諸本が共通して持つ「連歌に対する心得、発句・切字・脇・第三・面八句・てには等の説明、連歌に用いる語彙の分類・列挙」という三部構成と成っている。諸伝本は、簡略な表現を本文に持つ諸本グループAと詳しい表現を本文に持つ諸本グループBに二大別できる。当本は、B系統諸本に属する本文

を持つ写本である。管見内諸本¹⁾(写本28本、版本4種類)の中の基準ではあるが独自の異同部分(独自表現・欠文、語句の配列順序の異同)は、少々あるが、奥書以外の長文にわたる本文の欠落、文章の順列順序の移動はみられない。次に当本にみられる欠文と独自表現のいくつかを記す。本文は、岩波文庫本『至宝抄』による。引用部分の下に頁数、行数を記した。岩波文庫本『至宝抄』に当本文の該当箇所がない場合は、当該箇所と推測する頁数と*印を記した。網掛け部分は、当本の欠文・独自表現箇所である。独自表現の部分は、当本本文によった。(以下同じ)。

(欠文)

1 第一御作為肝要に候、いかに物を知り候ても作爲なき人
(二三三頁二)

2 或いは暮ばや明るともいひ、或いはまだ宵ながら明るなど

(二三四頁一〇行)

3 いさ ふた葉より句ふ木もいさ梅の花 同

(*二三九頁一〜二行)

4 いかで 春と秋といかで和葉の薄紅葉 専順

(*二三九頁七〜八行)

(独自表現)

1 鳥となくて如何。歌にはかやうに詠み申事か昔は御入候
(二四一頁七行)

2 一 こち 東より吹風也 (二四五頁一五行)

3 一 きさらぎ 二月の事なり (二四七頁四行)

4 生るを放 八月十五や八幡におゐて放生会の事也

(*二五二頁二行)

前掲の欠文は、いずれもほとんど一行分に相当する量である点に注目できる。欠文1は「作為」、欠文2は「明る」の重なる表現による目移りと考えられる。欠文3・4は、きれ字の例証を示す部分であるが、当本で意図的に省略した箇所とは考えられない、書写時か祖本で既に欠脱していたと推測する。「いさ・いつ・いづれ・いく」と連続する点からも目移りかとも考えられる。

独自表現1〜4は、注記を一段と充美させて詳しく説明を加えている点に注目できる。特に独自表現2・3は、管見内諸本に見られない点からさらに詳細に説明が加えられた写本と推察する。

次に当本と諸伝本との関連において、当本本文の特色をみる。岩波文庫本文と当本の10字前後の異同箇所を次に掲げ、「表A」には、当本の本文と一致する諸本名を示す。

1 荻のこえ虫の音鹿の啼く夕など物淋しく (*二三四頁四行)

2 一 こそと申て・けり共・ける共とめ不申候。れと大略留申

候。爰御習有事に候。(二四二頁七行)

3 一 舟にのりと付候事 (*二四二頁一三行)

4 一 こち 東より吹風也 (二四五頁一五行)

5 一 生るを放 八月十五や八幡におゐて放生会の事也 (*二二

五一頁二行)

6 一 ほや作る 薄にて作たる家也。諏訪の神事有 (二五一頁一

〇行)

7 しぐれ 十月ばかりにかぎると説あり。冬のはじめより暮れ

の冬なで仕候。涙の時雨同事なり。(二五一頁一四行)

8 春の宮 東の宮の事也 (二五七頁一行)

B系統本について、独自表現、欠文、語句・文章の配列順序を基準にして六グループに分類した²⁾。その分類に従い「表A」をみるに、B系統本④²⁾(東京大学蔵乙本、島根県某家蔵本、版本IV類本) B系統本⑤²⁾(鷹司文庫本、内閣文庫本、天理大学蔵丙本、同丁本)の諸本と一致する事がわかる。B系統諸本④・⑤いずれのグループも独自の加筆・付加されたと考えられる本文を持つとする特色が指摘できる²⁾。つまり当本は、B系統諸本④・⑤グループの持つ本文を併せ持つことにより一層詳細な説明が付加されたと考えられる本文を持つ写本であるといえよう。Bグループに属し、目移りによる欠脱と覚しき部分もあるが、諸伝本中極めて欠脱部分が少なく、連歌に用いる語彙も豊富に列挙してある整った本文をもった写本である。

翻刻に当たっては、次のような方針をとった。

凡例

一 本文は、家蔵本『連歌至宝抄』を底本とした。

一 翻刻に際しては、私に改行、句読点、濁点を施した。

一 仮名遣い、あて字、畳字「・・々・く・・・」ふりがな、ミ

セケチなどは、底本のままとした。合点は省略した。

一 異体字、旧字体、略字、宛字、変体仮名は、一部原本通りの場合があるほかは、通行の字体に改めた。

一 不審な本文は、底本のままに翻刻して、その右わきに「ママ」と記した。

一 改丁は(〇)をもつて示し、丁数とその表裏を(1オ)・(1ウ)のように記した。

一 二行に分ち書きがされている所は、(〓)で、三行に渡り分かち書きがされている所は、(〓)で囲んだ。

(翻刻)

夫連歌は色々のむづかしき習御座候へ共第一御作意なき人の連哥はふしくれだち候て聞よからず候。いにしへの人の申されしも五尺の菖蒲に水をかへるがごとくぬれくどさはやかに仕立べき由候。付合より合の事さして定事有べからず候。古今の序にも人の心を種として萬の事のはとぞなれりけると御入候。唯今も心に面白きと思食候事を仰出され候へば、をのづから古き」1オ

哥の心にも相叶候。もろこしにも日本の哥のごとく詩を作て鳥獸草木の名四季・恋・述懐の詞等を選置候。みな日本の人の心に少も相たかはず候。又詠哥の大概は定家卿哥を読べきやうをしるしをかれ候。其詞にも心は新を以先とし詞は以古を可用。又曰、和哥に師匠なし。古き哥を以て師とすと御座候間、古き詞をおほえなされ候て奇特の御作意を」1ウ

仰出され候へば、残る所なき御連歌しにて候。昔の人の哥とて皆々よきにはあらず候。古今集を始とて代々の詞をも当世はみな嫌事おほく御座候。不好事も詞のつゞけようにより候て能聞え候と定家卿

仰をかれ候。御茶湯なども哥の道同じことと承及候。古き道具をもつて心をあたらしくあそばされ候事、右に申候定家卿の心に相叶候をや。連哥も茶湯も」2オ

其時く〜に随て一様にはあらず候。昔よりは去嫌をれんく〜にきぶくなり。付所も一段ごまかになり申候。古き連哥は詞の縁のみを取付、心大方の句共御入候つる。唯今は用付とて嫌申事おほく御座候。さるに書付申候。然ば連歌は哥一首を二つに分つゞけ百韻となし申候。さりながら哥と連哥と少かはりめ御入候。哥は上の句に其心聞候はねども下句にてことほり、又下の句の心を上にてこと」2ウ

はり申事おほく御座候。連哥は一句く〜に其理りなくては不叶事にて候。然ば一句の心體にして姿詞幽玄に、前句への取寄はつれざるやうに、又三句めかけはなれ候ごとくなざるべきより外の事有間敷候。さし合の言葉執筆又其座敷のこうしや沙汰仕事にて候間さして御心につけられ候はでもくるしからず候や。又発句わき第三に」3オ

心持御座候。又てにはに少習御入候。少々書付申候。又哥道に本意と申事御座候。たとへば春も大風吹、大雨ふり候事等御入候。春雨も春風も物しずかなるやうに仕事本意にて御座候。又春の日も事によりみじかく覚候にも御入候へどもいかにも永々敷やうに申ならはし候。又花の本意の事花とばかりをしいだして申候は桜の事にて御座候。但桜花と申候ては證花に不用候。又花桜をも付」3ウ

来候。乍去花を引はなれ同面に桜を不仕候。證花と申て一座に花四御座候。貴人功者ならで平人は斟酌在て事に候。一折の内にては花かんように仕候間よく思あをなして可仕事に候。花に始中をはりの心もち御入候。先、としの内より春を待折ふしより花のあらましを

いひかたらい、春たちぬれば桜がえだに雪のつもりて花ぞげなる事
をおもひやり、又このめ春雨打ぞ、ぐ比には今幾日ありてか」4
オ

咲出るをみむと待折ふしもやうく梢ほのかに色めくをみては一花
ひらくれば天下の春ぞとしといひ、或は都の空の家くさくら咲
ものこらぬよしをき、ては花見車のあとさき袂をつらね、ひねもす
往來のたえざるよそほひ、或は山里に契りをく花も咲たりと告ぐる
使あり。取あへず馬にくらをき、木本に至ては、肴さかづき取く
のあそび、春の日の暮るをもしらず、帰るさをも」4ウ

忘つ、今宵は花の下ふしして、おぼろ月夜にしく物はなしとうち
ながめ、あすはまたもとのしほりの道をかへ、まだみぬ方の花をと
いさなふま、に、あけぼの、空かきくれ雨そほふるに、ぬる、とも
同じくば花の陰にやどらん事をおもひ、立別る折しも花を手ごと
おりおもひくの家づとなどいひて、玉章短冊などをそへて送り、
又とし比をとづれざる人も花の盛にはとひよして」5オ

けふこずばあすは雪とふりなんことを思ひ、春も末にうつり行は、
あだにちり行花をみても世の中のはかなき事をくはんじ、またいづ
くにかのこれる花もあらんとあらぬみ山のおくなど尋入候。青葉隠
の遅桜をみては初花より猶めづらしく思ひ、春もくれはつればせめ
ては忘形見とて衣を花の色にそめむ。更の日にもうつり行ば花の袖
をぬぎかへん事を悲しみ又梢の若ばの紅にみ」5ウ

ゆるをも花の名残ぞと打詠、郭公の初こゑを聞てもなお花をしたふ
心待るのみ、又夏の夜は、みしかき事をむねとして、或はくるれば
やがて明るなど読申候。又杜鵑はかしましきほど鳴候へ共、まれに
聞めづらしくまちかぬるやうによみならはし候。五月雨の比こそ明

くれ月日のかげをもみず道行人のかよひもなく、水たんくとして
山をも海にみなし候やうに仕事大意にて候。又秋は常にみる月も一
入光」6オ

さややく面白やうにながめ、四季共にをく露も殊更秋はしげくして、
草にも木にもをきあまるふぜひ仕候。さて秋の心、人により所によ
りにぎはしき事も御入候へども、野山の色もかはり物さびしく哀な
る秋の本意にて候。又秋の夜のながきをあかぬ人も候へども暁の
ね覚に心をすましこしかた行末の事などおもひつげ明しかねたる
さま尤候。冬も又長雨などふる事も候へども時雨の本意として」
6ウ

一とをりふるかとすれば晴はる、かとすれば又ふりなどして日影な
がらにむらくしくれもさえざえし月の向後にもおもはざる一時雨
板屋の軒、さ、の庵りなどに音あらまきてひ仕來候。又雪は遠山
のは、おく山里などに降つもあり、妻木薪木の道も絶、旅人の袖もは
らひかねたる折ふしも都の空にはめづらしく初雪うす雪など興を催
やうに可然候。旅の本意と申は」7オ

たとひあ中の片原にて仕候連哥成共心を都へなし候て仕候。はじめ
て旅にたつ時は或は相坂山の関をこえ或は淀の川舟行末遠くおもひ
やり、海にこぎ出る折ふしは都の山を跡にかへりみてなつかしく、
昨日けふかの旅ながら月日を送るやどに覚て野ち山ちの旅ねにも故
郷をこひしたひ、草の枕の夢の内にもこしかたの事のみ待、打覚ぬ
れば松風うら波の音を恨、人やりならぬ道ながらはるく」7ウ
きぬる事を悔しみ、かへるさには姿も瘦つかれ、麻のさ衣もしほれ
果たるように仕ならはし候。恋には聞恋・見恋・待恋・忍恋・逢
恋・別恋・恨恋、様々御入候。何も人にこひらる、やうには不仕候。

先聞恋とはまだみぬ人を風のたよりにきゝて、おきふし物おもひとなり、あらぬ伝をたのみ、一ふでをもつたへまほしくおもふこゝろなり。又みる恋とは思はざる道行ふりに輿車の下すだれのひま」
8才

より見初、又はさる家の葎木丁のかげよりほのかにみし其面影忘れずしていかなる中だちもがなとおもふ心、是見恋也。待恋とは年比ちぎり置ても何かとさはりありてうち過、又いつの夕必とたのめをき文の返しなど見待ては心もあくがれ、昨日今日の日をも暮しかね、一日のうちにちとせをふる心ちしてまちわぶるおりふし萩の葉のをとづれ花すゝきのまねく」8ウ

をも君が来かと思ひ夕ぐれになればさらぬかほにて門のほとりにたちやすらひ、よのつねのきぬの袖にも空だきなどして夜の更行くをかなしみ待宵の鐘の音はあかぬ別の鳥の聲はものゝ数にあらざるとよみ待るも是なり。何忍恋とは故有人にいひよりて、およそそのぬし心とけく或はよの聞えを憚、夜なく行通ても人にあやしめられて立かへるふせい又は」9才

一筆の玉章にもうき名やもれんとおもふ心是忍恋也。又逢恋は年月の思ひの末をとげ、こよひはあたりの人をしづめ灯火ほそぐととか、げをき、閨のうちをもよしあるようにつくろひなし、待折しも月のほのかなるに、ちいさきわらはを先にたて妻戸のわきに立やすらへるきぬの袖を引又ねやの内へいざなひ入てもまだ打つけなれば互に恥かはし古器などもとりあへ」9ウ

ず打ふすさむしろのうへに枕をならべながら、また下ひも、つれなかりしをとやかくといひよりて、や、こゝろも打ちとくるま、にさ、めごとなどあさからぬ情おもひやるべし。別恋とは偶々とひく

る人もよひには余所めを忍び、ふけ果る比ほひにあひ逢ちぎりなれば、やがてわかれん事を悲しみ、秋の夜の千夜を一夜になしてぬるともあくまじきよしをいひかたり、鳥のこゑかねの」10才

音のあけほのをいそぐ事を恨み、今宵別ては又いつあひみん事もおぼつかなく袖の涙せきあへぬまゝに、やうく月も入がたになり、しの、めの雲も心ほそく引わかるゝまゝ、にちからなく衣くの跡をしたひ見送り待て又ねの夢の儂もはかなく心ならず後の朝のてい、誠に言のはも及ばざるべし。恨恋こと更しなおほきにや。先常く契置中も人の」10ウ

いひなしにより絶はつる事を恨み、又は我よりまさる人にうつろいぬるをば世の中の例として、かくこそある物なれど数ならぬ我身を恨るのみなり。或は比翼連りをちかひし中にもむなく成し跡にてはながき恨のことはをたらね、或は二道かくる人は互の恨やむ事なし。又おきふしそひなるゝ半にも、少のふしをいひ出して恨る事もあり。又はあまりのつれなき人をこひくゝてむなく」11才
なる人は其怨念を残しても、けとなり、その心をなやます事おほし。此外、ことにふれおりにしたがひて恨のかず、更く申尽すべからざる物なり。

一 発句の事 第一其時節相違候はぬように仕候事肝要に候。ほつ句は百韻の始に候へば、いかにも長高く幽玄に打ひらめになきやうに仕候。ほつ句は切字と申事御入候はで不叶候。其きれ字無御座候へば」11ウ

平句のように相聞候。四季の外、雑の発句と申事は無御座候。はいかいも同前たるべく候。

切字の事

かな 月の秋花の春立朝哉 宗祇

や 山や嵐花の波たつ春の海 同

し さえし夜の川音遠し朝霞 同

ぞ 花さけといはぬばかりぞ雨のこゑ 専順

か 花のえもかくなる物か夏木立 智蘊

もなし 春たてば花の色みぬ木々もなし 祇 12才

も哉 時鳥遠山ならぬこゑもがな 同

けり みる人を風も待けり花盛 同

ぬ 秋更ぬ松のはかたの奥つ風 同

し 紅葉せぬ秋も恨し雪の松 同

む あすもこむ比は花の、小鷹狩 祇

を 松風もほに出る秋を萩のこゑ 同

さぞ 夜は月さぞ住江の夕かすみ 同

よ 梅が、よ色は千入も染つべし 同

いつ 染ばいつ山は霧の浅みどり 同 12才

いづれ 雪いづれ庭のうの花遅桜 祇

いく みずもあらぬ遠山いくへ朝霞 同

こそ 花の水山こそ千入しがの海 同

らば 名もさらばきかざらましを時鳥 同

下知 今朝ちるにならひてきゆるこそ雪 同

大方此分用來候

一 脇の句の事 ほつくの心を請て、其時節相背候はぬように一かどさはやかにあそばさるべきものに候。 13才

一 第三の事 前への寄所は大方に候ども、一句のがらを長高く大やうにあそばさるべく候。第三は大略てどまりにて御入候。さ候

はねばはね字にて候。自然には又もない共留候。此外は不好候。

一 面八句の内十句めまでも不仕事

神祇・尺教・恋・無常又は名所、其外さし出たる詞など不仕候。ことによりほつ句には神祇・無常・名所等御座候。 13才

一 てにはの事 一 過去のし

一 現在のしとて御入候。みし・聞し・いひし・過しなど過去のしにて候。とをし・近し・青し・高しなど現在のしにて候べく候。

現在のしにて哉とも・て共とゞめ申さず候。

音たかし氷ぬ谷のながれかな

松青し太山の雪のきえ果て

かやうの句を、てには違と申候。過去のしにてはとまり申候。

一 夜はまだ明る東雲の空 14才

一 舟はまだ向ひの岸に付もせて

一 是も猶てには違にて候。

一 こそと申て けり共・ける共とめ不申候。れと大略留申候。爰御習有事に候。

一 ぞと申ては るととゞめ申候。

一 はね字の事 いつ・いづれ・いく・なに・いかに・などこれと

うの詞まではね申候。其外、かと・やとにてはね申候。此字なく

にてははねられず候。

一 一字はねと申事御入候。けん・せん・なんなどはね候事、右

の 14才

字御入候はねどもはね申候。

當世嫌ひ申候用付の事

一 弓に本末・はる・をすなど付候事

一 弓に本末・はる・をすなど付候事

一 舟にのりと付候事

一 けぶりにかすみ・雲・霧にたな引など付候事、右付様よはく候
とて當世一段と嫌ひ申候。

一 本・末・はる・をす・引など云句に弓を付候は尤可然候。

一 法に舟・馬など付にはよく御入候。

一 なびく・たつなどにきり・かすみは 「15才

よく候。右此類おほく御座候。

一句の道理不聞連歌

一 たゞひとり海士は入江に棹さして

舟ともなくてさほさすいはれず候。

一 わたし守こそ波にまかすれ

舟共なく候てわたし守とばかり不仕候。

一 庭にけさ色かもふかく咲いでて

花となくて如何。

一 木つたひとつ、も初音をそなく

鳥となくて如何。哥にはかやうに読申事、昔は御入候。 「15ウ

古今に、木づたへばをの羽風にちる花を誰におほせてこ、ら鳴

らん 連歌にはかやうに不仕候。

同意の連歌の事

一 うちむかひとつ、月をみるころ

秋の夜の更果て行く空もおし

一句、夜の更るをおしみて不詮候。前句の月によりか、り候。

一 暮るまで眺もあかず花をみてと云句に

立ざりがたき春の木のもと

かやうに付候 「16才

事花のぬけがらにて候。

一 花とくんとぞ色をあらそふ
川きしに藤山吹の咲出て

かやうに付候事、同意にて候。

一 花とくんとぞ色をあらそふと云句に

みねの松ひとり春をや送るらん

かやうに付のけ度候。昔より申をかれ候。はいかにも又同事にて

候。

みちのはたなる草ぞみじかき

道理かな一くちつ、もくらはれて

一句に生類もうへ物もなくば、如何付候事の中辺にま、在 「16

ウ

之事候。

たつもた、れずあるもいられず

あしのうら尻のとがりに物できて

これは同意のはいかにて候。

たつもた、れずあるもいられず

はぬけ鳥弦なき弓におどろきて

かやうにつけのけたく候。

一 見えつかくれつ

夜るひるの月日いつくにうつるらん

是もよく付申句にて候。

一 みえつかくれつ

風さそうふ柳のおくに花咲て

付やうは何も面白御座候。さり 「17才

ながら連哥は風情を守とする事に候間、花の句まざるべく候哉との事に候。又ある人の曰、見えつかくれつゝの一句の道理た、ず候間、付句も不曲と被申候へば、宗祇申され候。御前句恋の句にて候。恋の句は、おもふ人をさして、逢ぞ・別る、ぞ・待ぞ・見るかなと申ならはし候。此見えつかくれつは思ふ人の事にて候間、一句も聞え候。古き連哥など此類おほく御座候。是は「17ウ

恋の句に候。
一 雨しふらずはたちもとまらじ

野を遠み春の草やく夕煙

兼載の付句に候。是を取成の連哥と申候。雨ふらずは草やくけぶり立とまるまじきと被付候。立とまりはけぶりの事に取成付候。然に前句立もとまらじといふ事、一句の道理立がたく候やうに候へ共、如此つかうまつり候事おほく御座候。

ゆき、まれなる道のかたはらなど申句は「18オ

上手の連哥におほく御入候。人の往来の事にて御座候。古き上手の連哥御らんじ候はゞ、みなく御がつてん行申候べく候。

初春之詞

一 立春 〈年の内はつ春は哥には春に読候へども連哥には冬のきに仕候。〉

一年こえて 一 あら玉のとし

一 若水 一 門の松

一 筆試る 吉書の事にて候 「18ウ

一 霞 〈初春より暮の春までつかうまつり候。鐘かすむと云ては〉
非夜哉。又月灯などなくとてはよるかすみは不仕候。又かすむる

と云詞文字はちがい候へども詞のつゞけやうにて春に成り申候。

一 鶯 是も初春より末のはるまで仕候。

一 子日 はつねの日、祝を申候。此日、小松を引うへ命を延る祝を仕候。

一 若葉 〈正月七日七草をつみ候て祝申候。せり・なすな・こぎやう・たびらこ・仏の座・すゞな・すゞしろ。〉

是ぞ七草 「19オ

一 残雪 〈雪ま 雪消る 雪とくる 雪きえぬと申て春にて候。〉

一 氷とく 〈氷ながる、氷の隙〉 一 水ゆるむ

一 あたゝか 一 うらゝ 一 のどか

一 さえかへる 一 こち 東より吹風也。

一 あを馬 〈白馬と云也。あを馬と読申候。正月七日に白馬のせちゑとて内裏にあを馬を御らんせられ候事御入候。〉

一 梅 〈冬木より咲物にて御入候へば句嫌はづ春に仕候。乍去二月までのこるやうに仕候。〉

宗祇の発句 春なかば冬の桜さく太山かな

かやうにせられ候。み山はさむき故に冬木のやうに「19ウ
わびて咲けりとなり。又此花を花の兄共申ならはし候。

一 柳 是も初春より末の春迄仕候。

一 下萌の草 一つのぐむあし

一 このめ 一 わか草

一 帰るかり 一 さ蔭

一 おぼろ夜 是も初春より末の春まで仕候。

一 雉子 一 きじとして春にて候。

一 あさ鷹 白尾の鷹 継尾の鷹 なきとりかり、何も春に成申候。

一糸あそぶ 春の日かげにちり／＼とちりのように見え候を申候。

一百舌鳥 一よぶこ鳥 一かほよとり 「20オ

一やけの 一おぎのやけ原 一こそ

一棹ひめ 春をつかさどる物也。 一む月 〈正月の事也。〉

一すぐろ 一あらはしり 踏哥のせちゑとて正月十四日十六日

に京中の男女のこゑのよきをあつめて年のはじめのいはひに詞を

作てうたはしむる事あり。此節会の名を霰はしりと申也。

一あがためし 〈ゑ中の人を召てくわんを給を云也。十一日より三

日也。あがたとは田舎を云申也。〉

中の春の詞

一おだかへす 是も正月の末より三月迄仕候。 「20ウ

一花をまつ 一春日まつり

一南祭 八幡のりんじのまつり也。だいにておこなわる。

一鳥のさえづる 〈是も初春よりくれの春迄も仕候。乍去春の末暖

氣をえてさえづる也。〉

一てふ 一蛙 一松の若みどり 松の緑としても春に成不申候。

惣別みどりとして氣を持事無御座候。唐の詩には緑を夏と用候。

日本には春にも夏にも成不申候。但立松は春にて候。

一松の花 松には十かはりとして花のさくよし申候。十かへるとは

千念を申候。

一椿の花 只椿とばかりは春に成不申候。 「21オ

一苗代 一種蒔 一はつ花 一初桜

一仏の別 二月十五日しやか御にうめつの事を申候。

一畑うつ 一燕 一雲雀 一鳥の巢

一きさらぎ 二月の事也。

末の春

一水日 一みのひのはらへ 三月上旬の巳の日水の上に盃をうかべ

て色々のあそびをなす。日本にも詩を作り哥読曲水の宴とて三月

三日にする事也。

一桃 からも、共 一なしの花 一花盛 「21ウ

一桜かり 桜を尋事也 一桜人

一桜田 一さくら鯛 一桜貝

一わかめ 一若鮎 一鳥の帰る

一藤 一山ふき 一弥生 〈三月の事也。〉

暮の春

初の夏

一衣更 〈春の衣をかへて夏の衣をきる事也。〉

一杜鵬 〈そもつれなく鳴ぬように仕なし候。夏の初より五月迄待

やうに〉 「22オ

一餘花 〈よくわとは若ばなどに花をの残たるを申候。又時鳥に花

をむすびても夏になり申候。〉

一わか葉 〈花はとばかりは木のわかばの事に候。草の若葉春にて

候。〉

一杜若 〈哥には春の題に入申候。連哥には夏に仕候。〉

一牡丹 〈ふかみ草とも、又廿日草とも申。是も哥には春にて候。〉

一卯花 うつ木とも仕候。

一夏木立 一茂る草 〈是は五月六月までも仕候。〉

一玉卷葛 〈くづの若ば也。〉 一榊とる 一神祭

一平野祭 「22ウ

中の夏

一螢 四月より六月まで仕候。 一ひおりの日 五月五日六日右近
左近の馬場の祭の日の事也。

一きそひかり 百草を取ばかりを申候。

一きをひ馬 けいば也。 一あふひ

一早苗 一立花 一櫛 一ゆり

一若竹 〈ことし生の竹共、又若^{ワカ}ばの竹とも〉

一五月雨 桜の雨と申も五月雨の事にて。 一23オ

一水鶏 一あゆ 一かやり火 一鶺鴒 〈うふね・うかひ火な
ど仕候。〉

一まこもかる 一めをかる 一鹿子 一ねらひかり

一蟬 一みじかよ 一あけ安き夜共 同事也。

一毛をかふる鷹 一鳥屋鷹

一末摘花 べにの花の事也。 一さ月 一籩

末の夏

一水室^{ヒムロ} 一蓮 一撫子^{ナデシコ} 〈石の竹、とこ夏おなじたぐいにて
候哉。〉宗祇の発句帳にもひとつにあみ入られ候。 一23ウ

一夕かほ 一うり 一あぢさい 一

一桜あさ 〈只あさの名なり。桜の時分あさをまくゆへに桜あさと
いふ也。〉

一なつぞ 夏川の糸など同也。 一みる 一夕立

一涼し 一扇 〈かいほりと云も扇の名用候。かうもりの羽を扇
ににせ候。〉

一河社 〈水の上に社をいはひて夏神樂をする事なり。〉

一あつき日 一泉 一清水結 〈清水とばかりは、夏にあらず
候。〉

一御祓 〈六月の晦日に水辺にてはらへをする也。然共晦日に不限
候へども川のみそぎ 一24オ
には月などをよみたし。 一4)

一秋ちかき 一こぬ秋 〈古哥に、こぬ秋のいつくれはて、うす
水結ばかりの山の井の水と読申候は、山の井の余りに涼しき事
を申さんとて、秋はまだこぬに、その秋きて又秋も過、冬になり
て、うす水のむすぶほどずしきとよめるなり。涼と云句に同意
の句御入候。あつき日・しみづむすぶ・身にしみなど、付不申候。
扇をならすと同意になり可申候。風に扇は嫌申さず候。風ばかり
の用にて候はず候。かざす物にて候。又舞の時持申候。礼儀にも
持申候。其により 一24ウ

風には嫌申さず候。 一はやしの鐘

一かぜかほる 一雲のみね 一たかむしろなど申事御入候。ま
して連哥にも不仕候へば書付申候。みなもろこしの詞より出申候。一

林の鐘と申候は六月の異名にて候。風かほると申は、南の風吹て
涼しき事を申候。昔琴を弾候へば風のかほりたる由候。雲の嶺と
申は夏はみねのごとくおそろしき雲おほく立申候。たか蓬と申は、
水・波・浮草などを紋にをり付たるむしろ 一25オ

にて候。涼く見候はんためにしき申候。

一みな月 六月の事也。

初秋

一秋立 一七夕 〈天川・としのわたり・秋去衣・ねがひの原・
ほし合〉皆七夕のことばにて候。

一葉ちる 〈只一はのおつるとばかりも秋にて候。柳などに仕つ
け候。〉但詩にても作候間桐の事たるべく候と申ならはし候。 一

25ウ

一ひぐらし 一残るあつさ 一秋涼し

一扇を置く 一露 〈初の秋よりくれの秋迄仕候。〉

一月 同前 一霧 同前 一ひさ木

一桐 一いなづま 一身にしむ

人ごとにくれの秋のように心得候へども初秋にて候。身にしむと云詞も秋に成候。是等は三月にわたり可申候。

一虫 是も三月にわたり可申候。

一松虫 同前 一すず虫 同

一きりぐす 同 一26オ

一はた織 同 一萩 同 萩のこゑと仕候へば風の事にて候。

只萩とばかり仕候ても風に二句嫌申候。風をもつぱらとする故に候。

一薄 一荳 一ふぢ袴 一萩

一女郎花 一草の花 一わさ田

一玉祭 〈七月十五日に尊霊ソリヤカを祭也。〉 一ひや、か 一はせを

一月草 〈露草也。〉 一鳩吹 〈秋のはじめはとをとらんとて鳩のまねをして吹事を云。〉

一相撲 〈ことりつかひと云也。内裏の節会也。〉 一文月 七月

也。 一26ウ

一立田姫

中の秋

一鹿 〈すがる又かせぎ、鹿の異名也。かせぎは秋にあらず。〉

一鶉 うずら衣とはみじかき衣を云也。

一小鷹狩 一雁 一初嵐

一すさまじ 一星月夜 〈星の光月のごとくなるを云。〉

一忍草 一おもひ草 一つた 一くず

一權キ 一田を守 一小田守 一27オ

一舌鳥 もずの草くきとも。

一駒迎 〈きり原のまきの駒を内裏へ奉る也。八月十五夜に相坂まで勅使迎にゆくを駒迎と申なり。〉

一こよひの月 一はつしほ

一生るを放 〈八月十五夜八幡におみて放生会の事也。〉

一野山の色付 一初もみじ

一掃衣 衣うつきぬたの音など仕候。

一櫛 一椎 一栗 一色鳥 一鳴 一27ウ

一長夜 一野分 一は月 八月也。

一とや出の鷹 一鳴 一ひた 〈なるこの事也。山田の僧都なども鹿をおどろかすゆへ秋なり。〉

一初鳥

末の秋

一うら枯の山 一菊 〈おきな草、菊の異名也。〉

一や、寒き 一はださむき

一夜寒 〈よさむとつゝかねば秋にあらず夜をさむみなどは冬也。〉 一28オ

一あしのほ 〈あしの花ともする也。〉 一はや作る 薄のほにて

作たる家也。諏訪の神事有。

一露草 一露時雨 〈はつしぐれと仕候ても冬にて候。乍去秋の道具を少結び候へば秋になり申候。〉

一木葉かづちる 只木葉ちるは冬にて申候。木のはちる色など仕へ

ば秋になり申候。

一 枯野の露 一 草かれの花の残る

一 柴 はなとしては秋なり。但八月也。

一 ひづち 一 千鳥 かりを結たる霧に結びても秋にて候。 28

ウ

一 長月 九月也。 一 暮の秋 一 残菊

一 くづれやな

初冬

一 しぐれ 一 十月ばかりにかぎると説あり。冬のはじめより暮の冬
まで仕候。涙の時雨、同事なり。 〽

一 粟 是も三月にわたり申べし。

一 さむき 同前 一 木葉 一 是も三月にわたり可申候。朽は

一 木葉衣 同前 一 たか狩 同前

一 初雪 一 炭瓮 三月にわたり可申候。 29オ

一 綿 一 冬籠 一 小春 一 神無月

一 あじろ 一 千鳥 三月にわたり申。

中の冬

一 氷 一 雪吹 一 つら、 一 たるひ

一 ひを 一 ふしつけ 一 水鳥 一 是も三月にわたるべし。 〽

一 をし 同前 一 鴨 同 一 みぞれ 一 霜

一 豊の明の節会 此節会には其年の稲を神に奉りて其後天子もきこ
しめし臣下に給るなり。 29ウ

一 小忌衣 せち糸の舞人のきる物なりと云。

一 ほとけの原 一 わかけ原と云草をかんざしにか・へる也。是も節
会の道具也。 〽

暮の冬

一 神楽 一 庭火 神楽の時の庭火也。

一 埋火 三月に渡るべし。

一 里桜 冬木の桜春を待つ桜と仕候。

一 春近 一 としの内の春 一 しはす

一 年の暮 詞一にしめ尤三つ有事 30オ

一 かしこき 一 一にはりこんなる心、二には忝心、三には堅固と云
心也。 〽

一 しのぶ 一 一には人にかくる、心、二には恋しくおもふ心、三に
は堪忍する心 〽

一 哀 一 一には物のあはれしき心、二には面白心、三にはあつぱれ
と云心 〽

一 かごと 一 一にはすこしの心、二にはかこつけごと、三にはちか
ひ事なり、一 〽ちかひとはせいもんなどの事なり。 〽

一 玉のを 一 一には命の事なり。玉はほむろのことば也。二にはし
ばしの事なり。三には糸によりをの事なり。 〽 30ウ

一 形見 一 一には人のかたみの事なり。二にはかごをも云。花かた
みとは花かごの事なり。三にはたがひの心也。 〽

一 ながめ 一 一にはながむる心なり。二にはなが雨の心也。 〽

詞一にして二つ有事

一 すさぶ 一 雨すさぶとふる事也。風すさぶとは吹事也。 〽

一 雨ふりすさむとは正事也。吹すさぶはやむ事也。 31オ

一 身がくれ 一 一には見えかくる、心也。二には水にかくる、事也。

一 かつ 一 一にはかつくと云詞なり。二にはかくと云事也。

一 さかしら 一 一には人の中事を云と也。二にはかしこだてをする

心也。)

一 やさしき (一には尋常なる心也。二にははつかしきこゝろなり。)

一 われて (二にはわりなくと云心也。二にはわかれてと云詞をか
の字を略していふ也。)

一 たえて (一には絶果たるなど云心たえくなどは絶つたえず有心
也。二にはたえてと書てはかんにんの心なり。堪。 31ウ)

一 みさほ (一には物の不変色をかへぬ心なり。二は水の棹なり。)

一 みそか (一にはひそか也。二には三十日をも云なり。)

一 あやなし (一には多きなき也。二にはあぢきなき心なり。)

一 ゆくりなく (一には心ならずなり。二にはゆくゑなきなり。)

一 よと、も (一にはよもすがら、二にはつねの心なり。)

恋の詞 32オ

一 契とは 約束の事なり。 一衣く 別の事なり。

一 又寝 別てまたぬる事也。 一えにし 縁の事也。

一 後の朝 別ての朝の事也。 一やすが たよりの事也。

一 さ、めぐと 私事なり。さ、やく心もあり。

一 むつごと (むつまじき詞也。むつまじきとはししき心なり。)

一 兼ごと かねてやくそくする事なり

一 そむきく 思ひ不合躰なり。

一 夕とゞろき 夕に胸のおどる事なり。 32ウ

一 なづさふ なる、心也。

一 ぬれ衣 (なき名立を云、空事をいひおふすることなり。)

一 しま 物いはぬ事也。

一 いなせもきかぬ (いやともおふともいはぬ事なり。)

一 打付 一たわれぬ 遊女けいせい事也。

一 うかれぬ 同前 一かいまみ 《そと見る事なり。垣のひま
より見る心あり。)

一 思くま (おもひなくともとめよるはおもふかひなきなり。)

一 あさはか あだなはかなきこゝろなり。 33オ

一 あだし心 (あだの心なり。しかやすめ字なり。やすめ字とはお
き字なり。)

一 恋すてふ 恋すると云詞なり。

一 たづきなき たよりなきなり。

一 めくばせ めませする事なり。

一 心かへ わが心を人に取かへばやの心なり。

一 あふさきるさ ゆくさま、くるさまなり。

一 よるべ より所也。 一新枕 初てあふ事也。

一 こひのやつこ 恋につかはる、心なり。

一 こてふにいたり きたれと云にきたる也。 33ウ

一 古き枕 いにしへの妻をおもふ心なり。

一 みじろく 身をうごかす心なり。

一 わかれの気色 我が人かのやうなり。

一 恋草 只恋を云也。 一忍草 (秋なり。うへ物なり。)

一 忘草 只忘る、事也。 一こと草 たゞ詞なり。

一 こりずま (只こりぬ事也。又名所の須磨によそへて云事もあ
り。)

一 あやにく 人にくき也。 一中と云詞 (おもふ人と我との中
なり。)

一 すゞろ こゝろならずと云心なり。

一思ひの煙 おもひを火によそへて云也。 34オ

一いもりのしるし いもりのちを取て女のひぢにぬりてをけばおちず。もしあしきふる舞をすればうする也。其故にいもりとは宮守と書なり。

一身をしる雨 へさはりの雨のこと也。又涙の心にもすべし。へ

一さはり 君と我との間にさはり有事也。

一衣をかへす へ恋しき人を夢にみんとては衣をかへしてぬれば夢にみぬるなり。へ

一いらへ 返答の事也。 一うしろめたき 心えなきなり。へ

一かたおもひ 人はおもはぬに我はおもふ心なり。

一あひ思ふ もろともにおもふこゝろなり。 34ウ

一はぢかはし 互にはづる事也。

一心くらべ 互の心をくらぶるなり。

一あだくらべ 互のあだなる心を云くらぶるなり。

一目かれぬ めをもはなたぬ事也。

一人めの関 人めしげくて関となるなり。

一なまめいたる うつくしき躰なり。

一まめ男 真実の心有おとこ也。

雑

一あさまだき 朝早くの事也。 35オ

一あさぼらけ 朝の事也。

一明くれ へあけ行時分、くらくなるなり。又明くれとは朝夕のことなり。へ

一朝なき 朝の静なる躰也。夕なきともする也。

一朝なげ あさにげとも、朝夕と云心也。

一あさけ 只朝也。 一朝付日 朝日也。へ夕付日とも

一あさい 朝ねの事なり。

一朝戸出 朝とく戸を出ることなり。

一昼ま 只ひることなり。

一夕ま暮 まの字に心なし。只夕暮也 35ウ

一夕月夜 夕の月なり。 一夕ば山 ゆふべの山也。

一ゆふまどひ よひに早々ぬるを云。

一くれまどふ 忘却したる事也。

一夕され 夕の事也。 一山かつら 暁の雲を云。

一さよ さの字に心なし。よるなり。

一いざよひの月 十六夜の月をも云。只安らふ心も有。

一夢のうきはし 夢の事也。

一夢かへ ぬると云詞に付るかへと云也。

一夢のたぐち 慥なる夢也。

一うば玉 よると云枕詞、惣別くろき事のまくらことばなり。 36オ

一足引 山と云枕詞なり。 一あめつち 天地の事也。

一あらがね 土といはん為の枕詞也。

一久堅 空又月などいはん為の枕ことばなり。

一敷たへ 枕といはん枕詞なり。

一瑞籬 久しきと云枕詞也。

一雲のはたて へ夕の雲の旗のてのなびくににたるを云。へ

一雲井の庭 内裏の事也。

一雲敷の内 同前 一藤つば 一なしつば

一梅つば へだいらにあるさく花なくしては春に非ず。へ

一すべらぎ 帝王を云也。

一春の宮 東の宮の事也。一敷島の道 哥の事也。 一 36ウ

一大和詞 同前。一難波津の道 是も哥の事也。

一むくさ 哥に六の品有事也。

一夕付鳥 庭鳥也。よるの鳥共、くだかけ鳥ともする也。

一鶴の巢 雑なり。一鳩のうき巢 同前

一山鳥の鏡とは 山の尾を隔ておのがかけを女鳥かとおもひて鳴を山鳥の尾の鏡といへり。

一野鳥の鏡とは 野にある水を云也。かりばの鷹うせてみえざるの
のりの鷹のかげの水にうつりたるを見てより野鳥の鏡と申なり。

一我から もにすむ虫の名なり。

一千尋あるかけ 竹の事也。 一 37オ

一心の松 心の杉 不変心也。心の松人を待こゝろにもよめり。

一苔庭 いなむしろ むしろを敷たることく成を云。

一松風の雨 松風を雨の音にきく也。

一川音の雨 川音を雨の音にきく也。

一木のはの雨 是は冬なり。うへ物にも降物にも嫌なり。松風の雨
同前。

一草枕 只旅枕也。植物にあらず。さ、枕はうへ物なり。草を枕
としても不非植物ニ。

一かりふし かり枕 旅なり。かりそめにぬるてい也。

一かり衣 かりそめの狩衣來也。狩する時にきる物なり。 一 37

ウ

一波枕 旅なり。舟なくともする也。磯や浦里にて波を聞の躰也。

一かぢ枕 舟なくしては不仕候也。

一わたし守 是も舟をのけてはせぬ也。

一高瀬舟 川にもたかせさす共するなり。高瀬とはかりも舟の名
なり。

一さすらへ らうしながさるる心なり。

一いなかわたらひ 京の中かけて有躰なり。

一ひなびたる む中めきたる事也。

一だみたるこゑ なまりたるこゑなり。

一からき夜 政道なき世なり。 一 38オ

一さがなき あしきこゝろなり。

一ゆ、しき いまゝしき事也。

一しかすが さすがなり。

一玉ゆら 少の事也。 一いさ、め しばしの事也。

一にげなき にあわぬを云事也。

一ことだつ 祝言の事也。 一ことぶき 祝言の事也。

一つとめて 朝早々の事也。 一けぢめ 差別也。

一おさ／＼しからず おとなしからず

一つたなし いやしきなり。

一むべ げにもなり。 一うしろみ こうけん也。

一とのゐ人 番衆也。 一かぞいろ 父母也 一 38ウ

一はらから 兄弟なり。 一後の親 継母也。

一老らく 只老の事也。 一もろ人 諸人也。

一友どち ともだち也。 一家づと みやげ也。

一うるかふる 元服の事也。 一つくもかみ 老たるかみ也。

一つ、らおり なたかなたへ曲たる坂也。 一しおり 《道の
しるし也。木の枝などを打かけてしるしするなり。》

一ちまた 道のさかひ也。

一玉ほこ 道なり。 一ひぢかき雨※ 〈俄の雨にて袖をかづく駄也。〉

一村雨 気マなし。但春冬にはせず。 一おまし 御座也。

一ふなおさ 舟人也。 一生し立る 世人さする也。

一くち木書 □5絵の下糸也。 一おはしま 〈らんかんなり。〉
39オ

一いらか かはらぶぎの家の駄也。 一まどゐ 〈なみゐたるていなり。〉

一はしゐ ゑんなどに出てかたはしに居る駄也。

一あけのそを舟 かざりたる舟なり。

一四の緒 びわの事也。 一むまやぢ 旅屋の事也。

一あづまや 四方へあまだれのおつる家也。

一しのに しげき心也。 一いざとき 〈ねられぬこゝろなり。〉

一人やりならぬ 心からゆく事なり。

一心づから 只心なり。 一よしさは 〈よしさらばなり。〉

一さりとも さありともなり。

一おもなし 無面目也。 「39ウ

注(1) 拙稿「『連歌至宝抄』の諸本について」(『国文目白』第22号昭和58年

3月)、「『連歌至宝抄』の諸本について(続)」(『国文目白』第23号昭和

59年2月)、「『連歌至宝抄』の諸本について(三)」(『日本女子大学紀要

文学部』第33号昭和63年3月)を参照されたい。諸本名は、その折使用

した符号、諸本名に準じている。

(2) 前掲注(1)の「『連歌至宝抄』の諸本について(三)」の中でB系統諸本

について語句の順序・欠文・そのグループのみに見られる独自表現を基準として六グループに分類し、各グループの特色を記した。

(3) □部分「古哥に」の上を墨で消してある。

(4) □部分は「古哥に」の上を墨で塗りつぶしてある。

(5) 3字分の部分的破損である。次の「絵」の「糸」編が破損しているが、前後から破損文字は、「下絵」と推定する。